

AMDA 年次報告書

2012.4.1 ~ 2013.3.31



バングラデシュ洪水緊急医療支援活動で物資提供に集まる人々 2012.71

平成 24 年度も多くのみなさまの温かいご支援により様々な事業を実施することができました。
ここに感謝とともにご報告いたします。

緊急支援活動

■バングラデシュ洪水緊急医療支援活動



巡回診療に訪れた親子

- ◇実施場所 バングラデシュ ラングプール管区 クリグラム県
- ◇実施期間 2012年7月7日～7月19日
- ◇派遣者 竹谷 和子 調整員・AMDA ボランティアセンター参与
- ◇現地での参加者を含めた事業チーム構成 医師2名、保健師1名、調整員3名(竹谷調整員含む)

◇事業内容

2012年6月下旬から降り続いた豪雨のため、バングラデシュ北部のメグナ川を中心とした広い範囲で洪水被害が発生。死者131人、約102万人(36万世帯)が被災する惨事となった。特に被害の大きかった地域では、家屋の浸水や道路の冠水の他、土砂崩れによる集落の孤立などの被害が広がり、衛生状態の悪化・伝染病の発生などが懸念された。この状況を受け、AMDAは、本部から調整員1名を派遣した。AMDAバングラデシュ支部、日本バングラデシュ友好病院からの医療チーム(医師2名、保健師1名、調整員2名)を結成し、7月12日早朝から移動を開始し、首都ダッカから車で約8時間のところに位置するバングラデシュ北部ラングプール管区(Rangpor)クリグラム県(Kurigram)に到着し、活動を開始した。13日から医療チームは、ウリプール郡、クリグラムサデル郡の3つの村において巡回診療を実施。のべ1,155人の診療を行った。主な症状は風邪、頭痛、身体の痛み、下痢、赤痢、発熱、皮膚の痒みなどであった。また、AMDAが活動した地域は貧困層が多く食料・飲料水が不足していたため、地元NGO・AFADの協力を得て、食料(非常食用の米、糖蜜等)、浄水タブレット、ORS(経口補水液)、さらにサリーやルンギなどの衣料品をのべ3,000人に支給することができた。AMDAチームが訪れた時には、北部の地域にはまだ支援物資が行き渡っておらず、

巡回診療や物資支給の際にはいずれも順番を待つ人々が長蛇の列ができ、現地の人々はAMDAの活動を大変喜んでくれた。

◇受益者の声

米と甘いものをもらってうれしい。
下痢をしている。薬をもらったので安心した。
洪水で家が流されて、悲しい。

◇現地協力機関

AFAD (Association for Alternative Development)
JBFH (Japan Bangladesh Friendship Hospital: 日本バングラデシュ友好病院)
AMDA バングラデシュ支部

■インドネシア・アンボン島洪水緊急医療支援活動



インドネシア支部医師による診療

- ◇実施場所 インドネシア・マルク州アンボン島 バトゥ・メラ地区、マムア地区、バツ・ガジャ地区
- ◇実施期間 2012年8月3日～2012年8月10日
- ◇派遣者 アロシウス シタミ 調整員・AMDA 野土路農場担当職員
- ◇現地での参加者を含めた事業チーム構成 医師3名、看護師1名、調整員1名(シタミ調整員含む)、地元ボランティア2名

◇事業内容

7月31日に発生した台風サオラ(Saola)による豪雨により、インドネシア・マルク州(Maluku)アンボン島(Ambon)で洪水・地すべりがおきた。この災害による被害は死者13人、軽傷者5人、行方不明者3人、1785軒が浸水被害に遭い、131家族、合計599人が住居を失い、被災者数は12,753人。(インドネシア国家防災庁8月6日)

これを受けて、AMDAインドネシア支部からの要請により医療チームを派遣することを決定。AMDAインドネシア支部より、医師3名、AMDA本部より調整員1名を被災地に派遣し、緊急医療支援活動を実施した。これは、単に緊急医療支援活動としてだけでなく、対立する両グループに医療を提供することで和平構築

に資するAMDAの「医療和平プロジェクト」を視野に入れた活動となった。

4日にアンボン島に到着した医療チームに、アンボン島出身の医師1名と地元ボランティア2名が活動に加わり、被災地ニーズ調査を行った。それにより被災者は医療面だけでなく食糧支援も必要としていることがわかり、麺類、ミネラルウォーター、ココナツオイルを購入し配布する準備を整えた。5日には、大きな被害を受けたアンボン市内のムスリム居住区であるバトゥ・メラ(Batu Merah)地区に臨時診療所を設置。AMDAインドネシア支部の医師による診察と医薬品の支援を被災者94人(男性61人、女性33人)に対して実施した。皮膚病や上気道感染症などの患者が多かった。6日、7日には深刻な被害を受けた地域の一つであるマムア(Mamua)地区で準備した支援物資300セットを避難所とその周辺地域で配布、またインドネシア軍と合同で再びバトゥ・メラと、キリスト教徒居住区のバツ・ガジャ(Batu Gajah)地区にて支援物資の提供を行った。

◇現地協力機関

AMDA インドネシア支部

■フィリピン・ルソン島洪水緊急医療支援活動



物資配布に詰めかけた人々

- ◇実施場所 フィリピン共和国 ルソン島リサール州 モンタルバン カインタ地区及びサンプエナ地区
- ◇実施期間 2012年8月11日～2012年8月17日
- ◇派遣者 山路 未来 看護師・AMDA本部職員/古城 デイジー 調整員兼通訳・岡山倉敷フィリピンサークル顧問
- ◇現地での参加者を含めた事業チーム構成 AMDA派遣者2名およびフィリピン国軍約40名、現地ボランティア約50名

◇事業内容

2012年8月に首都マニラを含むルソン島を襲った台風11号(現地名ハイクイ)は、7月末から続いた季節風の影響と相まって、河川の氾濫などによりマニラ首都圏の約7割が被災する甚大な被害をも

たらした。この台風で死者60人、避難民65万人が発生し、政府は非常事態宣言を発令した。

この状況を受けAMDAでは、8月11日に看護師、調整員の2名からなる医療チームを被災地に派遣した。チームは現地協力機関であるフィリピン国軍の協力のもと、被災地訪問を通じたニーズ調査を行い、緊急医療支援活動を実施した。現地ではボランティア4名、軍医1名、看護師4名、薬剤師1名、歯科医1名ほか約40名の軍部隊がチームに参加した。8月15日は、河川沿いの集落であるリサル州カインタ地区・サンブエナ地区で、家屋の浸水被害に遭った住民の巡回診療を行い、上下気道炎や下痢などの症状を訴える患者述べ501人の診察を行った。同時に、咳・発熱、皮膚のかゆみ、下痢などを訴える患者に、解熱・抗炎症薬、抗生剤、咳止めなどの薬を処方し手渡した。また、チームが用意した米や缶詰等の食糧パックを376袋のほか、現地テレビ局財団より寄贈された米約700袋や地元の教会から集められた古着を仕分けし、世帯ごとに手渡すことができた。

またチームは急激な経済成長と都市化に伴い貧困層が密集して暮らすモンタルバン地区リサルプラザ避難所や、ワイナーズ多目的バスケットボールコート、ティパス避難所の3か所で、救援物資350袋の食糧パックの配給も行った。フィリピン軍の治安管理により、懸念されていた混乱や騒動に巻き込まれる事なく、安全で効率的に避難民のニーズに応える活動ができた。

◇派遣者の声

私が調整員として母国に帰ったのは今回で2回目。AMDAのお陰で、助けを必要としている人々を支援することができ、嬉しい。活動では、処方した薬を住民が売ってお金に換えてしまわないように、瓶入りの薬は開けてから手渡した。貧富の差が激しい現実に胸が痛んだ。(古城デージー調整員)

◇現地協力機関

フィリピン国軍 (Armed Forces of the Philippines)

■モンゴル洪水被災者に対する支援活動

◇実施場所 モンゴル オルソン県バヤンウンドゥル郡エルデネット市

◇実施期間 2012年9月17日～18日

◇派遣者 山路 未来 看護師・AMDA本部職員

◇現地での参加者を含めた事業チーム構成
AMDA 派遣者およびモンゴル赤十字ウ

ランバートル本部スタッフ5名(災害対策部長、ソーシャルプログラム部職員1名、企画部職員2名、オーストラリア赤十字からのボランティア1名)



支援物資贈呈式の様子

◇事業内容

2012年7月13日から14日、ウランバートルから400km離れたオルソン県バヤンウンドゥル郡で降り続いた強い雨の影響で鉄砲水が発生した。

NEMA(モンゴル国家危機管理庁)の報告によると、2012年7月16日までに2名の死亡者がでており、260世帯(1世帯平均5人)に影響し、うち約25%にあたる67世帯が全壊または一部損壊した。また、橋や道路も破壊され、15ヘクタール以上の農地も被害を受け、23,100世帯と12,000の事業所などが停電にまわられた。

この報告を受けて、モンゴル赤十字と協働で支援活動をすべく、AMDAから看護師1名を派遣することを決定した。

AMDA看護師は9月15日に日本を出発し、同日遅くに首都ウランバートルに到着。翌日からモンゴル赤十字のスタッフらと情報収集や、物資の調達などを行い、ウランバートルの北西約200kmにある被災地のオルソン県エルデネット市に向かった。

被災地では300世帯のうちの約25%にあたる67世帯が被害に遭っており、17日には生活支援物資の配給などの支援活動を行った。

支援物資として、AMDAからはお米、小麦粉、砂糖、塩を提供し、モンゴル赤十字からは毛布、ストーブが被災家族に手渡された。家を流されてしまい以前の生活に戻ることの出来ない家族は、一時的に家やゲル(モンゴルの移動式住居)を借りており、精神的にも大変なストレスを抱えていた。そこで赤十字エルデネット支部を中心として、支援物資の配布の他に、歌やモンゴルの伝統的な弦楽器である馬頭琴の演奏も組み込まれた式典を開いた。

◇受益者の声

いくらお礼を言っても足りない。本当にありがとうございます。感謝の気持ちを歌で伝え

たい。

◇現地協力機関

モンゴル赤十字ウランバートル本部
モンゴル赤十字エルデネット支部-MLB
Mid Lever Brunch-
モンゴル赤十字ボランティア

■グアテマラ地震緊急支援活動



被災した一家にテントと寝袋を提供

◇実施場所 グアテマラ共和国 トトニカパン県 ツァニスナン村、メディア・クエスタ村、チメンテ村、マクスル村

◇実施期間 2012年11月11日～

11月15日、2013年3月18日

◇派遣者 陰山 亮子 調整員・AMDA社会開発機構ホンジュラス事業コーディネーター/エメルソン ロドリゲス 調整員・AMDA社会開発機構ホンジュラス事業現地スタッフ/グレンダ マルティネス医師・AMDAグアテマラ共和国現地協力者

◇現地での参加者を含めた事業チーム構成

AMDA 派遣者およびトトニカパン県災害対策担当者、トトニカパン県サンクリストバル女性ボランティア組織、トトニカパン県女性支援課担当者

◇事業内容

2012年11月8日、グアテマラ西部チャンペリコから南へ24kmの場所で、マグニチュード7.4の地震が発生した。震源地に近いサンマルコス市では多くの建物や道路が損壊し、自動車が瓦礫の下敷きになるなどして死者43人、避難民2万人を出した。そこでAMDAは、グループ機関「AMDA社会開発機構」のホンジュラス事務所スタッフ2名を緊急救援チームとして被災地に派遣することを決定し、11月11日、ホンジュラスから空路でグアテマラ共和国入りした。ニーズ調査により避難民の寒さ対策に焦点を当てた支援の必要性が分かり、テント14個と寝袋50袋を調達し、トトニカパン県ツァニスナン村で、家屋が全半壊した被災者に、テントと寝袋を直接手渡した。この村は、死者は出なかったものの、災害の有無に係らず女性の非識字や乳幼児死亡

率が高い非常に貧しい村で、人々は寒い中での避難生活を強いられていた。また、手渡した物資は家屋の修復後には、将来の災害に備えて村で大切に保管されることとなった。

その後、現地の状況を注視していたところ被災者の生活再建が思うように進んでいないことが明らかになり、第2次派遣を決定。2013年3月18日、AMDAは、医師1名、地域組織のリーダー1名、トトニカパン県女性支援課コーディネーター1名、県政府の担当者2名を含むチームを結成し、トトニカパン県ツァニスナン村、メディア・クエスタ村、チメンテ村、マクスル村の先住民族80世帯に対して、米・豆・油・インカパリーナ（高蛋白質補給物）等の基礎食品を含む食糧救援パックの配布を行った。

今回の活動は、支援の目が届きにくい山間地域での復興支援を通して「私たちは決してあなたたちを見放しません。」というAMDAの活動の根底にあるメッセージを届けることが出来た。

◇受益者の声

地震の前は、3家族11人でレンガ造り、トタン屋根の家に住んでいた。地震の夜以降は、残った資材を集めて小屋を作って生活している。しかしそれでは狭すぎるうえ、夜間の寒さはしのげない。テントのお陰で、少しでも暖かくして夜を迎えることができ本当に嬉しい。

私たちのコミュニティに支援に来てくれたことに心から感謝したい。この支援の先にいる日本の皆さんに、ありがとうと言いたい。

◇派遣者の声

政府の支援は国家災害対策調整委員会を通じて行われる為、地方としては中央政府の指示を待つ時間が長い。今回のようにAMDAが直接被災住民に支援を届けることが出来たことを、非常に感謝している。（トトニカパン県の災害担当者）

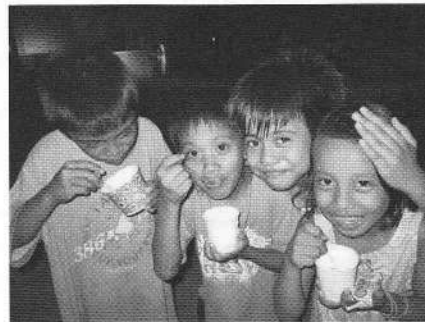
地域の人々、特に女性との相互扶助なくしては、この活動は実現しなかった。日本とグアテマラの人々の団結と友好関係が強化されると信じている。（グレンダマルティネス医師）

◇現地協力機関

トトニカパン県災害課

トトニカパン県サンクリストバル女性ボランティア組織 (Voluntaria de Acciones para la Mujer, San Cristobal Totonicapan)
トトニカパン県女性支援課 (Oficina Municipales de la Mujer - OMM, Municipalidad de Totonicapan)

■フィリピン・ミンダナオ島 台風21号緊急医療支援活動



おかゆをほおぼる被災地の子どもたち

◇実施場所 フィリピン共和国 ミンダナオ島 コンポステラ・パレー州 モンカヨ郡 サンホセ地区、ダバオ市 ジェードパレー地区

◇実施期間 2012年12月7日～12月17日、2013年1月26日～2月1日

◇派遣者 山路 未来 看護師・AMDA本部職員／大山 マージョリ 調整員兼通訳・岡山倉敷フィリピンサークル会長／喜久川 明日香 看護師・AMDA沖縄支部（沖縄セントラル病院勤務）／福岡 賢二 調整員・NPO BERT 理事／

◇現地での参加者を含めた事業チーム構成

AMDA派遣者およびフィリピン国軍、フィリピン沖縄県人会ボランティア2名、ダバオ市福祉担当局ソーシャルワーカー11名、地域の学生や市民のボランティア多数

◇事業内容

2012年12月4日早朝、フィリピンのミンダナオ島を台風24号（現地名ボーファ）が直撃し、大きな被害をもたらした。この台風に伴う豪雨は各地で地滑りや土砂災害を引き起こし、死者1,067人、負傷者2,666人、行方不明者843人を出した（国家災害リスク軽減管理評議会1月7日時点）。これを受けてAMDAは、12月6日、第1次派遣として2名を被災地へ向けて派遣。ニーズ調査などののち、9日、10日はダバオ市内で、医薬品や食糧物資の調達、配布用パック詰め作業を実施。配布用パックには米2kg、飲料水4リットル、いわしの缶詰3つを詰め、子どもにはお菓子を準備した。11日には第2次派遣者が加わり、12日は交通アクセスが悪く未だ支援が行き届いていなかったコンポステラ・パレー州モンカヨ郡サンホセ地区で483人の患者を診察した。主に、台風の影響と見られる外傷や皮膚疾患の患者、下痢の症状を訴える人、傷の洗浄や排膿が必要な人が多く、待っている間に高血圧症で倒れる患者もいた。その中で、地元のボランティア看護師に

助けられながら、チームは状況に応じたきめ細やかな医療対応を行う事が出来た。更に、被災した476世帯に、食糧パックを手渡すことで、生活再建を後押し出来た。緊急医療支援活動後も状況を注視していたところ、1か月が経過しているにもかかわらず、被災地域では深刻な食糧不足が続く現状を知り、第3次チームを派遣することを決定。2013年1月28日早朝にはミンダナオ島入りし、活動地をジェードパレー地区に決定し、30日、生活物資の配布や子どもたち対象の活動を行った。生活支援では、未だ家の片づけに追われていた500世帯を巡回訪問し、米2kgとシーツを配布した。また施設が泥に浸かり授業再開の目途が立っていなかった3歳から5歳の子どもが通う幼稚園に、椅子30脚、机6台、ノート60冊やクレヨンなどを提供し、更に、子どもたちが元気に遊べるように、けん玉やだるま落としゲーム等も行った。活動後には鶏肉と卵入りおかゆの炊き出しを行い、125人の日頃の栄養不足を補った。

◇受益者の声

わざわざ日本から来て診てくれて、ありがとうございます。（患者）

どこから手を付けていいかわからず、途方に暮れていたが、幼稚園の再開を目指して頑張る希望が湧いた。今回の支援に本当に感謝している。（幼稚園の先生）

おいしい、おかゆをありがとうございます。（幼稚園児）

新品のシーツをもらえるなんて、嬉しい。わざわざ日本から来てくれて、本当にありがとうございます！（物資受給者）

◇現地協力機関

フィリピン国軍

(Armed Forces of the Philippines; AFP)

フィリピン沖縄県人会

(Philippines Okinawan Society)

市福祉担当局

(City Social Service and Development Office)

■インドネシア・ジャカルタ 洪水緊急支援活動



診察を待つ人々に声をかける心理士

◇実施場所 インドネシア ジャワ島
ジャカルタ市 ペルマハン ケマン地区、
トマンバンジール カナル地区ほか2地区
(全4地区)

◇実施期間

2013年1月20日～1月25日

◇派遣者 山路 未来 看護師・AMDA 本
部職員／アロシウス シタミ 調整員・
AMDA 野土路農場担当職員

◇現地での参加者を含めた事業チーム構成

AMDA 派遣者および AMDA インドネ
シア支部5名(内科医師2名、心理士2名、
調整員1名)、AMSA インドネシア学生ボ
ランティア多数

◇事業内容

1月15日から降り続いた豪雨により、
インドネシアの首都ジャカルタで17日、
広域に渡り洪水が発生した。

今回の洪水による死者は32人、避難
民約4万人、家を失った人は10万人以
上にのぼった。(1月25日インドネシア
国家防災庁)被災者は、激しいスコール
が降り続き予断を許さない状況の中での
生活を余儀なくされていた。

被害状況などから判断し、AMDA では
医療チームを派遣することを決定。1月
19日に AMDA インドネシア支部のメン
バーが被災地ジャカルタに到着し、AMSA
インドネシアの学生ボランティアらと合
流。被災状況の調査及び医療活動の準備
を行い、20日には、日本からの医療チ
ームと合流した。AMSA の医学生らの多く
はジャカルタ在住であり、中には被災し
たメンバーもいた。

21日から医療と食料配布を軸とした
支援活動を開始。ジャカルタ市内のトマ
ンバンジールカナル(Tomang Banjir
Kanal)地区などを含む4つの被災地域で
25日までに、無料診療や食糧物資250
家族分(2キロ入りの米、水600ml、食
用油240mlを1セットにしたもの)の配
布を行った。無料診療活動では、600人
以上の診療を実施。上気道感染症、下痢、
皮膚疾患などの症状が多くみられた。ま
た医療チームの中には心理士2名が同行
し、診療に訪れた被災者の方々が、心理
士に被災した時の様子などをゆっくり話
すことで、感情を表に出すことができた。
また、医療スタッフが、自宅避難をして
いる方々に戸別訪問を行い、直接住民と
対話をしながら、健康状態の確認などを行
った。さらに診療場所まで足を運ぶこと
を躊躇する被災者が多数いたため、各
家庭を訪問し診療や健康相談を行う等、
効果的なサービスの提供を実現するこ
とが出来た。

◇受益者の声

医療支援、本当にありがたい。とても
心強かった。(トマン地区のリーダー)

トマン地区の一市民として、薬をもら
えて、本当にありがとうと皆さんに言
いたい。助けてくださってありがとう。(診
療に訪れた患者)

◇現地協力機関

AMDA インドネシア支部
AMSA インドネシア(アジア医学生連絡協
議会 Asian Medical Students' Association)

復興支援活動

■インドネシア・メラピ 火山噴火復興支援活動



寄贈した資材で水路の復旧を行う様子

◇実施場所 インドネシア ボヨラリ県
トロガレレ村

◇実施期間 2012年5月5日

◇現地での参加者を含めた事業チーム構成
NGO YKP スラカルタ

◇事業内容

2010年11月に発生したジャワ中部メ
ラピ山大噴火直後から AMDA は、日本か
ら医療チームを送り、被災者への緊急医
療支援活動を行い、発生半年後からは、
復興支援を行った。2011年5月に行わ
れた第1回復興支援は、マゲラン県ダク
ン区バンジュドノ村で行われ、溶岩や火
山灰を撤去する清掃に参加した住民ボラ
ンティアに食糧配布を行った。第2回目
は、2012年3月にボヨラリ県セロケ
ラカー村で復興支援の一環として水路復
旧プロジェクトを行った。

今回で3度目となった復興支援では、
冷えた溶岩によって村の農業用水路や灌
漑施設が壊れてしまったメラピ山近郊に
位置するボヨラリ県トロガレレ村からの
要請を受け、それらの復旧に必要な資材
を支援することを決定。緊急支援時から
協力関係にある現地 NGO「YKP スラカル
タ」と連携し、必要資材(水道管165本、
セメント15袋、ワイヤー100m、工事
用具一式、ペンキ2缶、レインコート2着)

を現地に届けた。

村民は、贈呈された資材を使い、早速
復旧作業に取り掛かった。農業用水が行
きわたるよう、水源付近に貯水池を作り、
破損した水道管を新しいものに交換、貯
水池から家や農園へ水道管をつなげる作
業を行った。

復旧工事は無事終了し、最後にトロガ
レレ村の住民を代表して、村長であり緊
急災害チーム長であるスシロ・ハスツチ
氏が、「失われた水が戻ってきた」と発言
し、灌漑施設の復旧工事に物資を提供し
た AMDA に感謝の意を示した。

◇現地協力機関

NGO YKP スラカルタ

■ハイチ大地震復興支援活動



歯科診療を実施したハイチ支部スタッフ

◇実施場所 ハイチ ポルトープランス、
フォンデネグ市ほか

◇実施期間 2012年9月13、14、17日
2013年1月12日

◇派遣者 ニティアン・ヴィーラヴァーグ
AMDA 本部職員

◇事業内容

2010年1月12日に発生し、31万人
以上の死者を出したハイチ地震において、
AMDA は発生直後から被災地に多国籍医
師団を送り、緊急支援を実施した。3か月
後からは、復興支援に事業を移行させ、
現在も、無料歯科診療、義肢支援、サッ
カー交流、復興支援参加者交流会を行っ
ている。

義肢支援事業

AMDA は、義肢支援の一環として、日
本から義肢装具士を一年間派遣し、義肢
製作工房を設置。同施設に義肢製作機を
購入し、約30名に義肢を提供するこ
とが出来た。義肢支援の終了(2011年1月)
にともない、工房で使用していた義肢製
作機を NGO「ミッションオブホープ」の
義肢装具センター(ハイチ)に寄贈する
ことを決定し、2012年9月17日、寄贈
式を行った。同団体では、AMDA で1年
間活動を行っていた義肢装具士が、継続
して活動を行っていることから、本贈呈
が決定した。寄贈式では感謝の言葉をい
ただき、協力関係を続けていくことを確

認した。

サッカー交流

2012年9月13日から14日には第2回目となるサッカー交流が、首都ポルトープランスで行われ、11歳から14歳のハイチ国内の子どもたち51名が3チームに分かれて試合を行い、交流を深めた。プログラムは黙禱で始まり、白熱した試合を行った。優勝チームにはメダルとトロフィーが授与された。

無料歯科診療

AMDAハイチ支部長を中心とした無料歯科診療が、2013年1月12日にフォンデネグ市で行われた。今回、本事業を実施したフォンデネグ市は、医療設備の整った町から遠く、住民は歯科検診を受ける機会や、歯の健康について専門家から学ぶ機会が限られている。今回の活動は昨年2月に同地区で行った歯科検診に引き続き、第2回目として実施され、村の内外から集まった67人の様々なニーズに応えることが出来た。

そのほかにも、復興支援参加者交流も開催予定である。

◇受益者の声

とても満足している。私は、今回聞いたことを同じ農村に住んでいる人に教えてあげようと思う。(無料歯科診療参加・女性)

前回は検診を受けました。AMDAハイチ支部のお陰で、歯の健康の大切さを理解することが出来ました。今後も年に3回ほど、このような検診を受けたいです。(無料歯科診療参加・男性)

◇現地協力機関

AMDAハイチ支部
サルベーション・アーミー (Salvation Army) 病院
NGO ミッション・オブ・ホープ (Mission of Hope : MOH)

■ルソン島(2011年10月)・ミンダナオ島(2011年12月)台風復興支援活動

◇実施場所 フィリピン共和国ルソン島ザンパレス州及びミンダナオ島カガヤン・デ・オロ市

◇実施期間 2012年6月

◇派遣者 大山マージョリ 調整員・岡山倉敷フィリピーノサークル会長/出口ジーナ 調整員・岡山倉敷フィリピーノサークル副会長

◇現地での参加者を含めた事業チーム構成
AMDA 派遣者を含む地域のボランティアなど



子どもたちに物資を配布

◇事業内容

2011年10月ルソン島、そして同年12月にミンダナオ島で発生した台風災害の被災者に対する復興支援として、2012年6月、AMDAは、主に子どもの教育に焦点を当て、故郷の為に活動する協力団体「岡山倉敷フィリピーノサークル」に義援金を贈呈した。

特にミンダナオ島を襲った台風24号は、2012年度で国内最悪の被害規模を記録し、死者1,000人以上を出した。AMDAは、発生直後より、岡山倉敷フィリピーノサークルと連携し、避難所での巡回診療等を中心とした緊急医療支援を行ってきた。半年以上経った被災地では、長引く避難所生活にストレスを抱える子どもがおり、被災児童への支援の必要性があがっていた。

今回の復興支援は、岡山倉敷フィリピーノサークルがイニシアチブを執り、被災地のニーズに応じて、約半年間、子ども用文具や歯ブラシ等の寄付を呼びかけ、実現した。AMDAは、同郷を想う同サークルの活動を支援すべく、義援金を贈呈し、復興支援を後押しした。

2012年6月、ミンダナオ島出身の会長とルソン島出身の副会長が被災地に入り、ミンダナオ島北部カガヤン・デ・オロ市で、小学1年から6年生の児童に学校用品と衛生用品900セットを寄贈、そしてルソン島北部ザンパレス州では、雨具と学校用上履き300セット、衛生用品や扇風機を寄贈した。この活動により、被災した子どもたちが再び教育の機会を得られるようサポートすることができた。

◇派遣者の声

今回、AMDAと岡山倉敷フィリピーノサークルのコラボレーションにより、大勢の被災者に笑顔が戻り、嬉しく思っている。

■東日本大震災復興支援

◇実施場所 岩手県上閉伊郡大槌町、岩手県釜石市、岩手県大船渡市、宮城県気仙沼市、宮城県本吉郡南三陸町、宮城県石巻市雄勝町、宮城県仙台市ほか

◇実施期間 2011年3月12日～現在継続中

◇派遣者(2012.4.1～2013.3.31)

菅波茂医師 (AMDA 理事長) 含むのべ30名(医師6名、看護師8名、調整員11名、准看護師3名、鍼灸師2名)
ほか、現地雇用5名



AMDA 大槌健康サポートセンターにて

◇事業内容

2011年3月11日に発生した東日本大震災の翌日から緊急医療支援活動を実施し、4月末まで医療だけでなく多岐にわたった活動を実施した。2011年5月からは「3カ年復興支援」として「医療・健康支援」「教育支援」「生活・自立支援」の3つの分野を柱として活動を継続している。その他にも、NPO法人つどい(岩手県大槌町)に委託してコミュニティ活動の支援を行っている。

医療・健康支援

公立南三陸診療所(南三陸町)および公立志津川病院(登米市米山町)へ夏季、冬季、春季に医師・看護師を派遣している。また、猪苗代病院(気仙沼市)に対しては、長期勤務が可能な看護師の呼びかけをするなどの支援を実施している。

健康支援事業としては、上閉伊郡大槌町設置したAMDA大槌健康サポートセンターで心身の健康支援をテーマに、コミュニティスペースを活用し、人々の笑顔が集う場所の提供を行っている。さらに同施設内にある鍼灸室と石巻市雄勝町では鍼灸治療支援を実施しており、高齢化が進む被災地において、非常に喜ばれている。



雄勝町では巡回で鍼灸治療を実施

教育支援

2011年度に引き続き、AMDA 東日本国際奨学金の支給を継続。2012年度は8校101名に奨学金の支給を実施した。11月3日には、第2回目となるサッカー交流事業も実施。今回は被災地4校の中学生を対象とし、被災地の中学校グラウンドを会場に実施した。学生の交流だけでなく、救護所として協力参加した医療関係者同士の交流の場にもなった。3月17日には、高校生同士の音楽を通じた交流の場としての「第2回絆コンサート in 大槌」を開催した。その他、ボランティアの受入れや交流事業などを実施した。

生活・自立支援

被災地の仮設商店街を中心とした被災地間を結ぶ事業を実施。2013年1月からは「復興グルメF-1大会」と銘打ってこれまで支援を行ってきた地域に限らず、広く被災地を結ぶ事業を実施している。その他にも震災ホームレス支援などを実施している。

◇受益者の声

こういう交流を続けてほしい。人の力はすごい。他の県でもサッカーをやっていたら友達としてつながれると感じた。(サッカー交流に参加した学生)

子どもたちが楽しそうにサッカーをしている姿を見て良かった。「震災から1年半以上経ったこの時期に開催してくれたことに感謝している。こうやって被災地のことを思っている人たちがいることは、子どもたちに伝わったはず。(サッカー交流に参加した教諭)

今まで、いろいろ被災地について調べてわかっているつもりだったが、訪れてみて初めて気が付くことが本当に多かった。自分の目で見て考えることがとても重要だと思った。また被災地に足を運んでない人には、ぜひ訪れてもらいたい。(絆コンサートに参加した岡山の学生)

中長期継続事業

■ AMDA フードプログラム



収穫祭ではたくさんの方が稲刈りを体験

◇実施場所 岡山県真庭郡新庄村

◇実施期間 2012年4月1日～現在

◇従事者 アロイシウス・シタミ AMDA 本部職員 (AFP 担当) / 柴田宙樹 AMDA 本部職員 (AFP 担当)

◇事業内容

本事業は「食は命の源」をコンセプトにアジアに有機農業を啓蒙・普及することを目的とした事業で、真庭郡新庄村野土路地区にAMDA農場を設置し、稲作を中心とした有機農業を行う。これまでにAMDAが海外で実施してきた様々な医療支援活動を通じ、「安全、安心な食」が健康な体を作るだけでなく、「安全、安心な食」には付加価値が付き、貧困地域の生活向上、労働意欲の向上につながることに着目。本プログラムを通じてアジアへの有機農業の技術移転を目指している。また、典型的な日本の中山間村である新庄村に農場を構えることは、地域振興に貢献できる。新庄村が2010年に掲げた「アジア有機農業プラットフォーム推進条例」に基づき、連携を行うことで、より自治体に根差した取り組みが可能となっている。

2012年から専任スタッフを2名配置し、稲作を実施。1等米を収穫することができた。また、「ひめのもち米」の栽培も行い、収穫したもち米でしゃぶしゃぶ餅やまる餅などの加工食品も出荷することができた。稲作だけでなく、白菜や大根、スイートコーンなどの畑野菜も無農薬、有機栽培で実施。市内のスーパーなどに出荷した。

さらに収穫した「AMDA有機米・コシヒカリ」を、新庄村の特産品と併せてAMDAの支部がある各国の駐日外国公館へ届けることができた。訪れたカンボジア大使館では、「カンボジアでも有機農業への関心は非常に高い。また、化学肥料を使わないので国民の健康を向上させられる今後の活動に期待しています。」などの言葉をいただき、いずれの大使館でも『人の体に優しい、安全安心の有機農業』に対する関心が高いと感じられた。2013年3月には有機農業の技術移転を目的としたインドネシアへの現地視察を新庄村とAMDAで実施。新庄村に似た気候風土のスラウェシ島マリノ村では、多量の農薬を使った農業を行っていることが分かった。さらに将来的な有機農業の実践地としての調査も行った。

◇2012年度の主な工程

5/28 田植え、6/6 あひるの放鳥

9/2 あひるの精肉加工、10/6 米の収穫

◇現地協力機関
新庄村

■ スリランカ・白内障手術プロジェクト



無料白内障手術の様子

◇実施場所 スリランカ ヌワラエリヤ市

◇実施期間 2012年8月22日～24日

◇派遣者 ニティアン・ヴィーラヴァーグ AMDA 本部職員

◇現地での参加者を含めた事業チーム構成
ヌワラエリヤ総合病院 眼科医・医療スタッフ 20人

◇事業内容

スリランカは白内障に苦しむ多くの高齢者がおり、その殆どは、都市部から離れた郊外に住んでいる。本事業を実施したヌワラエリヤ市は人口80万人以上が暮らすスリランカ中部に位置する紅茶の栽培で有名な町である。この紅茶栽培の地域に暮らす人々の多くが、経済的に困窮しており、特に高齢者にその割合が多くなっている。

AMDAではこれまでに医療と平和事業として、スリランカ北部ジャフナ地区、南部パーナンドラ市、東部トリンコモリー市などで3回の無料白内障手術を実施してきた。その第4回目として、2012年8月22日から24日の3日間、ヌワラエリヤ市内にあるヌワラエリヤ総合病院で、カラシバヤガナサ医師を中心に地元の眼科医のもと白内障手術が実施された。

全ての手術は熟練の医師によって行われ、重度の白内障の患者にはECCE(囊外摘出術)と呼ばれる手法がとられた。スタッフ20人体制で計50人の手術を行う予定だったが、そのうち5人は、術前の診察の結果から手術延期となった。

その他にも、今後のフェイコ(水晶体乳化吸引法)手術のための眼内レンズ10個を寄贈した。

今回手術を受けた患者の平均年齢は60歳で、術後は一様に視界がくっきりと良好になったと喜んでいました。

本事業はヌワラエリヤ総合病院職員や、地元の方々から高く評価された。

◇受益者の声

今までの人生で一番良く見える！
ありがとうございました。

◇現地協力機関

AMDA スリランカ支部
ヌワラエリヤ総合病院

■紛争復興支援スリランカ スポーツ交流プログラム



サッカーを行う男子学生ら

- ◇実施場所 スリランカ アヌラダプラ市
- ◇実施期間 2012年10月5日～7日
- ◇派遣者 菅波 茂 医師・AMDA 理事長
／ ニティアン・ヴィーラヴァーグ AMDA
本部職員／河田 雅史 カメラマン・
AMDA 参与
- ◇現地での参加者を含めた事業チーム構成
アヌラダプラ県、北ムラティブ県、
トリンコマリ県から仏教徒、ヒンドゥー
教徒、イスラム教徒、キリスト教徒の中
学生、教師、職員合わせて120名

◇事業内容

医療和平事業として、現地団体と協力し、スポーツ、宗教、文化の交流プログラムをそれぞれスリランカ北内陸部に位置するアヌラダプラ県にて実施した。医療和平事業とは、対立しているグループの双方に平等に医療を提供することで、和平構築に資することを目的とした事業である。AMDA は、スリランカの内戦停戦中の2003年から3年間、3つの異なる民族（シンハラ、タミル、イスラムタミル）に対して「スリランカ医療和平事業」として、医療や保健教育などを行った。また、次世代の平和を担う学生を対象とした和平事業として、スポーツや宗教の交流を通じて相互理解、和平教育を実現するべく、2011年8月に第1回スポーツ交流・文化交流・宗教交流を開催した。長期に渡って内戦が続いたスリランカでの和平構築事業の第二段階として、大きな一歩となった。

開会式では、スリランカ言語社会統合省、スリランカ教育スポーツ省、アヌラダプラ県、世界宗教者平和会議スリランカ委員会、教師と生徒それぞれの代表が共にランプに火を灯し、仏教、ヒンドゥー教、イスラム教、キリスト教の代表が平和と融合を願い、祈りを捧げた。サッカー（男子）とネットボール（女子）の交流では、民族混合チームを3つ作り、

対抗試合を行った。この試合は、人種、宗教の違いを超えた中学生たちの会話を促す貴重な機会となり、生徒だけでなく、審判役を務めた教師たちも試合を楽しみ、打ち解けることができた。

宗教・文化交流プログラムでは、中学生と教師がそれぞれの宗教施設を訪れ、お互いの信仰や習慣について学んだ。また夕方からはダンス、音楽、演劇などの文化的出し物をそれぞれが発表し、このプロジェクトを通じて互いの文化、民族、宗教に触れる貴重な機会となった。

◇受益者の声

来年もこのプログラムに参加し、みんなと再会したい
来年もぜひ開催してほしい！

◇現地協力機関

AMDA スリランカ支部
世界宗教者平和会議（WCRP）スリランカ委員会
スリランカ言語・社会統合省
スリランカ教育スポーツ省
アヌラダプラ県

■インド AMDA ピースクリニック



AMDA ピースクリニック開院4周年式典

- ◇実施場所 インド ビハール州 ブッダガヤ
- ◇実施期間 2009年11月～現在継続中
- ◇派遣者 菅波 茂 医師・AMDA 理事長
／ 難波 妙 AMDA 国際部部長／ニティアン・ヴィーラヴァーグ AMDA 本部職員
- ◇現地での参加者を含めた事業チーム構成
AMDA インド支部医療スタッフほか女性セラピスト1名、アシスタント3名

◇事業内容

2009年末の発足以来、AMDA ピースクリニックは地元コミュニティを対象にインドの伝統医学・アーユルヴェーダの治療を行ってきた。クリニックでは国内はもとより外国人巡礼者や旅行者が来院する。地元コミュニティにおいては無料医療キャンプなどの地域保健プロジェクトが根付いてきた。

無料医療キャンプでは医師1人、セラピスト3人、調剤師2人、アシスタント2人、調整員1人の合計9人で構成され

た医療チームがサマンヴェイ・アシュラム（Samanvay Ashram）を拠点にリュウマチ、頭痛、皮膚病などの患者59人に無料で治療を行った。無料コミュニティ健康プログラムでは延べ720人の裨益者を対象に診察や薬を処方した。また、歩行困難や寝たきりの貧困者には訪問診療を行い、薬やセラピーを無料で提供している。

2012年10月29日にはピースクリニックが開院から4周年を迎え、記念式典が執り行われた。記念式典では日蓮宗ご住職による活動の発展祈願が行われ、地元子どもたちへ奉納されたお菓子が配られた。

◇現地協力機関

AMDA インド支部

■モンゴル検眼事業



子どもの弱視治療セミナー

- ◇実施場所 モンゴル ウランバートル市
- ◇実施期間 2012年8月29日～31日
- ◇派遣者 高崎裕子 川崎医療福祉大学准教授／菅波 茂 医師・AMDA 理事長／難波 妙 AMDA 国際部 部長
- ◇現地での参加者を含めた事業チーム構成
モンゴル眼科協会、City Optic、AMDA
モンゴル

◇事業内容

2012年8月、岡山県国際貢献ローカル・トゥ・ローカル技術移転事業として、モンゴル眼科協会協力の下、川崎医療福祉大学医療技術学部感覚矯正学科視能矯正専攻 准教授、高崎裕子先生のセミナーがモンゴル・ウランバートル市で、子供の弱視治療をテーマとして開催された。

AMDA は、モンゴルの全人口の1/3が18歳以下であることに着目し、若年層の眼科治療の技術向上に貢献することは、医療分野のみならず、子どもたちの教育支援にもつながると確信し、2010年から眼科検診啓発とともに、検眼技術向上のセミナーを眼科医、眼鏡技術関係者対象に行っている。視力は生後3カ月から8歳くらいまで発達するため、幼児期に重大な異常を発見し、適切な治療と、矯正用の眼鏡を提供することが大切である。2012年度は、第3回目の事業として、川崎医療福祉大学、視能矯正専門家である高崎裕子准教授によるセミナーを8月

29日から3日間開催し、23名の眼科医が講義、実習を通して、眼疾患のために視力不良になった「低視力」者と、視機能回復の可能性がある小児の「弱視」の分類とその治療について学んだ。また眼鏡の必要な弱視の子ども16人にそれぞれに適切な眼鏡が無償で提供された。

これまで3年におよぶ一連の活動が評価され、モンゴル国眼科協会のブルガン会長 (Dr. Bulgan Tuvaan) より AMDA へ感謝状が贈られた。

今後も、モンゴル眼科協会、City Optic、AMDA モンゴルの協力のもと、子供の眼科治療分野の技術向上に貢献を続ける予定。

◇受益者の声

日本の先生に診てもらうために田舎からでてきました。いくらお礼を言っても足りない。

本当にありがとう。感謝の気持ちを絵で伝えたい。とてもよく見えます。

◇現地協力機関

モンゴル眼科協会
City Optic
アイリス ツアー

■カンボジア HIV/AIDS プロジェクト マラリア予防プロジェクト



世界 AIDS デーにイベントを開催

AMDA カンボジア支部では、2012年度、「HIV/AIDS プロジェクト」「マラリア予防プロジェクト」の2つのプロジェクトを去年に引き続き実施した。

HIV/AIDS プロジェクト

2012年度のキャンペーンは、「ゼロを目指す」をテーマに、「新たな HIV 感染者ゼロ、HIV/AIDS 患者の差別ゼロ、AIDS 関連の死亡者ゼロ」に則って実施された。正しい知識の啓蒙を目的として、Tシャツや性病や HIV/AIDS に関するパンフレットを制作、AMDA カンボジア支部が実施する研修を受けたボランティアが、コンボンスプー州やプノンペン州内の大学や高校、それぞれの地域住民へ配布した。また、世界 AIDS デーには、イベントを開催した。

イベントには地方当局やボランティアを含む200名が参加し、伝統的な人形劇やクイズ、パンフレットの配布を通じて、正しい知識の普及・知識の共有ができた。

マラリア予防プロジェクト

地域住民がプロジェクトに参加し発言していくことで、コミュニティ内の相互理解が深まり、コミュニティ主導が確立できるという考えに基づき、地域住民の能力開発、プロジェクト業務への関与、持続可能なシステムの強化、自治体の保健関係の人材と地域住民の連携を図った。具体的には、村落保健ボランティアに対する研修の実施、保健所職員に対する研修の実施、キャンペーン活動、地域におけるマラリア予防教育の継続、必要な医療サービスの提供促進などであった。

実際、研修を受けた村落保健ボランティアが、地域住民にマラリアの基礎知識や予防・対処法を伝える勉強会を開催することで、多くの人に正しい知識が浸透し、保健所職員の能力向上や、マラリア予防啓蒙活動の受益者の増加などの成果が見られた。

■バングラデシュ ピースビルディングプロジェクト



清掃活動をする子供たち

◇実施場所 バングラデシュ チッタゴン管区コックスバザール県マハムニ村

◇実施期間 2013年1月1日

◇事業内容

AMDA が提唱する多様性の共存を可能にする「オープン相互扶助」の考えに基づき、バングラデシュ・チッタゴン管区で宗教を超え民族が平和的に共存していくための医療和平をスタートした。イスラム教徒が大半を占めるバングラデシュにおいて少数派の仏教徒が住んでいるチッタゴン丘陵地域マハムニ村にある母子寮と AMDA の合同プロジェクトとして「Clean up for peace」を開始した。「Cleanliness is Holiness」をキャッチフレーズに、母子寮の子どもたち約100人が寮外へ繰り出し、積極的に清掃活動を行うことで地域と寮の関係も深まり、衛生への意識浸透につながると考える。

子どもたちは、楽しみながら一生懸命楽しみながら清掃活動を行い、これからも続けたいと話してくれた。

■インド・ラダック地域 歯科巡回診療プロジェクト



プロジェクトスタッフとともに

◇実施場所 国名：インド ジャンム・カシミール州ラダック

◇実施期間 2012年 8月2日～13日

◇事業内容

インド支部長が所属するインド・マニパール大学とヨーロッパ歯学生協議会が企画した歯科巡回診療プロジェクトに対する支援を行った。

マニパール大学およびヨーロッパ歯学生協議会の有志歯科医師、歯学生、歯科医療従事者により結成された医療チームが、インド・ラダック地域の住民に対し、巡回歯科検診や治療、小児に対する口腔衛生指導や摂食に関する啓発活動、医療従事者に対する医療教育を実施した。

同地域では、多くの子供がフッ素過剰摂取によるフッ素中毒症に罹患していることから、口腔および全身診査を実施。さらに、家庭の水道水を採集し含有フッ素量に関する調査を行った。また、教育を受けた歯科医療従事者が少なく、う蝕を有する永久歯は抜去されるため、既に、臼歯を喪失している児童も多い。このような状況を改善するためには乳歯期からの虫歯予防が重要であり、児童に対し歯磨き指導や口腔衛生に関する教育を行った。

ラダック地域は、広大な土地に人々が点在し生活しているため、全域をカバーした医療体制の構築は困難である。今回は、各地域で活動する医療従事者育成のため、ボランティアスタッフが模擬患者となり、地域医療の担い手に歯科治療器具の使用法や検診・治療時の技術的なポイントを指導できた。

今後も、「予防に勝る治療なし」をモットーにインド僻地での口腔衛生知識の普及や虫歯、口腔疾患の予防活動を実施する予定である。

◇現地協力機関

AMDA インド支部
マニパール大学
ヨーロッパ歯学生協議会
(European Dental Students Association)

人材育成事業

■第2回「おかやま国際塾」 インドネシア研修



小学校で手洗いの講習を行う塾生ら

◇実施場所 (国内研修) 岡山市 (海外研修) インドネシア スラウェシ島、バリ島

◇実施期間 (開講式) 2012年5月27日 (国内研修) 5月27日～8月24日 (海外研修) 8月25日～31日

◇派遣者

参加者: 岡山県内大学生3名 (岡山大学法学部1名、岡山大学薬学部1名、川崎医療福祉大学医療福祉学部1名)

引率者: 河内亜希 AMDA 本部嘱託職員

◇現地での参加者を含めた事業チーム構成
AMSA インドネシア

◇事業内容

「おかやま国際塾」とは、おかやま国際塾実行委員会が行う事業で、その委員会
はAMDAと岡山大学教員と共同で運営されている。

AMDAと岡山大学は2005年8月に国際社会貢献活動及び人材育成の推進を目的とし、連帯協力に関する協定書を締結している。同協定がきっかけとなり、2011年からおかやま国際塾がスタートし、2012年には、第2回が実施された。5月27日に開催した開講式から、出発までの約3か月間、国内研修として岡山県内の大学に通う3名の塾生らは現地の情報、スケジュールやホームステイの調整、活動内容企画立案、インドネシアで行う英語のプレゼンテーションなどの準備を、インターネットなどを活用しながらインドネシアの現地大学生と共に行った。

入念な準備ののち、8月25日から9月1日の日程で、インドネシアでの海外研修を行った。8月25日に関西国際空港

からインドネシア、スラウェシ島ハサマディンに向けて出発した塾生は、翌日から、現地大学生と共に宗教施設訪問、歴史的建造物の見学、東日本についてのプレゼンテーション、児童施設での衛生教育、ハンセン病施設見学、孤児院訪問、文化交流などの活動を行った。

◇参加学生の声

準備段階で思うように現地とのやり取りが進まず、苦労もあったが、現地で研修したことでそれぞれの国の良い所、悪い所を知ることができた。活動で得たものを他の人たちに発信していくと共に、お世話になった人たちに、そうでなくても、他の誰かに恩返しをしていきたい。

どんな状況でも対応できる準備をしていくことの大切さを学んだ。

◇協力機関

岡山大学法学部
AMDA インドネシア支部
ハサマディン大学
AMSA インドネシア

■ネパール人 看護師 日本国内研修



病院でトレーニングを受ける様子

◇実施場所 岡山県立大学、岡山旭東病院、金子助産院、高知大学医学部、総社市役所

◇実施期間

2012年11月26日～12月5日

◇研修生 マナ・タパ 看護師、サクタラ・グラガイン 看護師

◇事業内容

2012年11月26日から12月5日の日程で、AMDA シッタータ母と子の病院及び健康科学学院で働くネパール人看護師2名が岡山県立大学での研修を受けるため来岡した。

研修は岡山県立大学、高知大学医学部、その他県内外の医療施設で行われた。日本の病棟管理と看護技術を見学し、今後ネパールでの看護知識・技術の向上に役立てることが最大の目的である。研修後、ネパール看護師2名は、日本滞在中に得た知識と技術を基にネパールの看護環境の改善に努めて行きたいと抱負を述べた。

◇研修生の声

日本での10日間の研修を終えて、ネパールに戻り、すぐにスタッフミーティングを行いました。日本の病院は清潔で、感銘を受けました。また、日本の病院スタッフは患者をお客様として丁寧に接しており、この点もネパールとは違い、見習うべきだと思いました。

これまでネパールの私が勤務する病院内は土足で歩いていましたが、今後は日本の病院を見習い、院内の清潔さを保つために、上履きを導入し、また、患者が安らげる環境を提供できるよう、院内外に花壇を設置することを検討しています。(マナ・タパ看護師)

◇協力機関

岡山県立大学、岡山旭東病院、金子助産院、高知大学医学部、総社市役所、高杉こどもクリニック

■ブータン人 救急救命士 日本国内研修



救急処置の訓練の様子

◇実施場所 岡山市

◇実施期間 2013年1月23日～2月3日

◇研修生 サルバジット・チェットリ 救急救命士

◇事業内容

ブータン王国保健省より、日本での救急車内搭載の救命救急装置等の活用技術向上のトレーニング要請があり、その研修生として救命救急士のサルバジット・チェットリ氏が2013年1月23日から2月3日の間、来岡した。2010年に岡山市消防局からブータン王国に寄贈された高性能救急車の仲介をAMDAが行い、その救急車が現在、チェットリ氏が救命救急士として勤務するブータン保健省医療ヘルプセンターで使われていることから、岡山市での研修が決定した。

チェットリ氏は、第21回全国救急隊員シンポジウムに参加し、日本とブータンの救命救急事情を比較することができた。さらに、1月28日からの研修は岡山市消防局救急課主導のもと、主に岡山市北消防署、岡山大学高度救命センターなどの岡山市内関係機関で行われた。消防署の

研修では、救急車に搭載されている装置の使用法のほか、心肺蘇生法、気道確保、挿管法、三角巾を使用した応急手当の仕方などを学び、救急車同乗研修にも参加した。

岡山市消防局消防指令センター及び岡山市内関係機関見学では、それぞれの機関の担当者が各施設及び施設の果たす機能についての指導があり、救急対応の一連の流れを理解することができた。

チュットリ氏は、「岡山滞在中にたくさん学び、得た知識をブータンの救急隊員に伝え、それがより多くのブータン人の命を救うことにつながることを願っている」と話した。

◇協力機関

岡山市、岡山市消防局
岡山大学高度救命センター
岡山市立市民病院

ASMP

AMDA Soul and Medicine Program AMDA 医療と魂のプログラム

ASMP とは、AMDA の活動地が第二次世界大戦で多くの犠牲者が出た地域であることから、戦没者と近年の自然災害犠牲者に対して、宗派、宗教を超えた宗教者による合同慰霊祭を、そして災害被災者には AMDA による医療支援を実施することを通じて、平和の追及を行う、宗教者ボランティアと AMDA の合同事業である。2000 年から毎年実施。

尚、各宗教者は自費参加しており、2012 年度はモンゴルで実施した。

■モンゴル



ガンダン寺の前で参加者とともに

- ◇実施場所 モンゴル ウランバートル市
- ◇実施期間 2012 年 8 月 26 日
- ◇派遣者 菅波茂 医師・AMDA 理事長、難波 妙 AMDA 国際部部长
- ◇現地での参加者を含めた事業チーム構成 AMDA モンゴル支部
- ◇事業内容 8 月 26 日、AMDA 魂と医療のプログ

ラム、ASMP (アスンプ) がモンゴル仏教総本山であるガンダン寺で行われた。モンゴルでの ASMP は、平和祈願祭として行われ、今年で 5 回目。モンゴル、ガンダン寺のご住職が青年僧もふくめ 15 名、日本からは、宗教法人大本が合同で世界平和祈願祭を執行。AMDA も平和へのメッセージを菅波代表が発表。2012 年は、日本、モンゴル国交樹立 40 周年の記念の年。ガンダン寺のご住職は、「銃をとり合う世界から花束を贈り合う世界になるように、モンゴルと日本がその先駆けとして友好を深めていくことが、世界の平和につながる」と訴えた。ガンダン寺を訪れていた観光客もともに参加して平和を祈った。

◇参加者の声

AMDA がこれまでモンゴルでこの平和祈願祭とともに眼科医療に貢献する事業を行っていることに感心している。この 5 年に渡ってともに平和を祈れたことに感謝するとともに、東日本大震災被災者の方々の一日も早い復興を祈っている。

(ガンダン寺貫主)

◇現地協力機関

ガンダン寺：モンゴル仏教総本山
AMDA モンゴル支部

AMDA の海外支部が主体として実施している事業

■ネパール東部ダマックにおける医療支援事業



リフェラルヘルスセンター

ブータン難民と地元住民の双方を医療支援対象とした事業として、1992 年から、メチ県ジャバ郡ダマックで AMDA ネパール支部を実施主体として継続している。現在事業は、小児科病棟や HIV/ 感染症予防事業、難民キャンプ内ヘルスケア事業、人材育成など他分野にわたる。

■ネパール子ども病院事業

(正式名称：シッダールタ母子専門病院)

1998 年 11 月、阪神淡路大震災後の日本とネパールの多くの支援者の方々の協



ネパール子ども病院

力により設立された首都以外で唯一の母子専門病院。設計については安藤忠雄建築事務所がボランティアで協力。ネパール南西部タライ平野に位置するルパンデヒ郡プトワル市に設置。高い医療サービス提供が定評で、地元からだけでなく 100km 以上離れた地域から訪れる患者もいる。年間分娩数は 3,000 件を超える。

診察科：

小児科、新生児科、産婦人科、女性内科

病床数：

141 床 (小児科、新生児科、産婦人科)

スタッフ数

146 名 (医師 19 名、看護スタッフ 56 名、検査スタッフ 9 名、薬局スタッフ 8 名、ヘルパー 28 名、事務スタッフ 26 名)

2011 年 8 月より新たな周産期病棟 (2 階建) の建設を開始し、2012 年 11 月に完成した。新病棟では、陣痛室、分娩室、産褥室、手術室、家族計画カウンセリング室、新生児集中治療室などを備え、妊娠・出産から新生児ケアを総合的に管理できるよう配慮している。2013 年 3 月 14 日には AMDA ネパール支部、病院関係者を中心に開所式典が開催された。事業管理については AMDA グループの「AMDA 社会開発機構」が担当している。

■バングラデシュ ABC プロジェクト AMDA Bank Complex



マイクロクレジットの会合を行う村の女性達

1999 年、AMDA 本部による資金援助を元に始まり、AMDA バングラデシュ支部が主体で実施するものである。特に、女性達が小規模融資 (マイクロクレジット) の利用を通して経済的に自立し、家

族の健康を守り、医療サービスにアクセス出来るようになる事を目指している。医療のほか、子どもの教育や、漁業や農業を主とした職業技術指導などに力を入れ、包括的な家族の生活向上に取り組んでいる。

発足から3年間に1,700人程度だった利用者は、現在、ガザリア地区の24の村落において、470グループ、計2,347人に増加し、マイクロクレジットの貸付サービスの受益者は1,394人に上った。

2012年は630,275米ドル相当のローンが返済され、そのうち75,170米ドル相当が利息収入であった。サービス利用者の貯金の総額も、10年前に比べ、倍になっているが、1件当たりの貸付希望額が増加傾向にある為、全ての利用希望者に対応できていない現状がある。

健康・医療支援については看護助手の養成や、若い女性対象の保健教育、栄養と食のプログラムを定期的に開催し、知識の浸透を図っている。職業訓練に参加した受益者は、専門技術を身に付け、現金収入を得ることができるようになっている。

■ AMDA インドネシア支部 口唇口蓋裂無料手術



インドネシア医師による口唇口蓋裂手術

◇実施場所 インドネシア 南スラウェシ州 マカッサル市、パロポ市

◇実施期間 2012年10月20日～21日、11月23日～25日

◇事業内容

AMDA インドネシア支部はスラウェシ島マカッサル市のイブン・シーナ・マカッサル病院、サヤン・ラカット病院、パロポ市のサウエリガディン病院と協力し、口唇口蓋裂無料手術を行った。

口唇口蓋裂(こうしんこうがいれつ)は、先天的な病気で日本人を含む黄色人種における発生率が高く、出生児500～600人に一人とも言われている。乳児の母乳の摂取に影響があるだけでなく、顎や言語の正常な発達も妨げるため、生後10週間から3ヶ月までに治療することが望ましい。しかし、インドネシアでは、知

識の不足や外科的治療を受けるための金銭的問題から、放置される例も多く、外観的な差別により就職や結婚において決定的に不利な状況に置かれていた。そこで本事業の実施に至った。

第1回目は2012年10月20日～21日(マカッサル市)、第2回目は2012年11月23日～25日(パロポ市)で行われ、AMDA インドネシア支部の医師を含む、医師、歯科医師、看護師、手術助手により実施された。

第1回目の2日間で手術を受けたのは20歳以下の口唇裂患者16名と口蓋裂患者17名の合計33名、第2回目の3日間では1歳から7歳までの小児40名と10代から20代の大人9名の合計49名。手術後には術後治療も行った。今後も、手術を受けた患者に対し、歯科口腔外科、児童心理、言語療法、栄養面からも総合的にサポートすると共に、さらに手術を必要とする人のために、活動の計画を考えている。

◇受益者の声

この手術により子どもの未来が少し開けた気がしてとても嬉しい。心から感謝したい。

◇現地協力機関

AMDA インドネシア支部
イブン・シーナ・マカッサル病院
サウエリガディン病院、ペンビーナ財団
口蓋口唇裂センター
ハサヌディン大学医学部麻酔科
インドネシア歯科協会
口腔外科インドネシア協会
AMSA インドネシア

■ AMDA バングラデシュ支部 ラム村緊急医療支援活動



焼かれた寺院跡地での診療活動

◇実施場所 バングラデシュ チッタゴン管区コックスバザール県ラム村

◇実施期間 2012年10月18日～19日

◇事業内容

2012年9月30日、仏教徒が多く住むバングラデシュ東南部のラム地域のラム村を含む複数の村で、焼き討ちや略奪の

被害が相次いだ。多くの人が村外への避難を余儀なくされるほか、村では仏教寺院のほとんどが焼き討ちに遭い、人々は平和な生活を一瞬にして奪われた。この非常事態に対し、AMDA バングラデシュ支部と日本バングラデシュ友好病院が共同で医療チームを結成し、ラム村で緊急医療支援活動を実施した。

緊急医療チームは10時間をかけてラム村に移動し、2012年10月18日と19日の2日間、地方自治体や地元仏教寺院の協力のもと、無料診療などを中心とした活動を行うことができた。活動にあたった医療チームは、医師15人、看護師などの医療スタッフ5人結成され、計20人で1,000人以上の患者を診療した。襲撃により飛び散った破片などで外傷を負った患者、襲撃の恐怖や今後の不安を抱え、喪失感やうつ的な症状を訴える患者が多く見られた。さらに、糖尿病患者のための血液検査や一般的な健康診断も行い、必要に応じて医師により薬が処方された。襲撃後、ラム村には、政府による医療支援は入っておらず、また、村から4km離れた場所に病院はあるものの、その地域の安全が確保されていないことや、交通手段がないことなどから、ラム村の人々は、病院の利用が難しく、今回の活動は大変歓迎された。

◇現地協力機関

AMDA バングラデシュ
日本バングラデシュ友好病院
地方自治体
地元仏教団体

■ AMDA グループ フレンドシップホスピタル



日本モンゴル友好病院開所式

日本モンゴル国交樹立40周年の本年8月26日、AMDA モンゴル支部長のオユンチメグ医師が、日本モンゴル友好病院(Japan Mongolia Friendship Hospital)を開院した。構想から12年の年月を経て、モンゴル、ウランバートルのダンバダルジャ地区に、内科、眼科、歯科、小児科、婦人科などととも30床の入院施設を備えた病院で、AMDA では開所に至るまでの支援を行ってきた。

開所式には、地元の関係者、AMSA モンゴル等が参加し、馬頭琴の演奏や歌が花を添えた。オユンチメグ医師は、「この開院を参加者とともによるこび、今後、高齢者が多いこの地域の医療に役に立ちたい」と抱負をのべた。

なお、同病院は AMDA グループの日本バングラデシュ友好病院（1993 年設立）、日本アフガニスタン友好病院（2009 年）に次ぐ、3 つ目の AMDA フレンドシップホスピタルとなる。

AMDA 高校生会 2012 年度の活動

県内の高校生を中心に、36 人が、ほぼ毎月 1 回、AMDA 本部事務所に集まり、行事の計画や打ち合わせ、学習会を行った。活動は昨年度に続き東日本大震災復興支援、「同世代間交流」を中心に進めた。



東日本からのゲストを交えて報告会

大槌高校生会との交流プログラム

7 月 25 日から大槌の高校生 3 名が AMDA・華蔵寺合同東日本被災者夏休み招待プログラムとして来岡し、その中で、岡山・大槌の高校生交流会を行った。交流会では岡山の学生が日頃の活動報告を行い、大槌の学生は被災時・復興の現状を報告した。さらに質疑・応答を行い、岡山の学生にとっては、被災地の同世代の話を聞くことが、衝撃を受けるとともに、自分達の認識の甘さを痛感し、被災地訪問への意欲付けにつ

ながった。その他ボーリングやホームステイなども実施し交流を深めた。

岡山大学医学部学園祭参加

11 月 3、4 日の 2 日間、岡山大学医学部キャンパスでの学園祭に AMDA 高校生会の紹介ブースを出展した。ブースでは東日本復興支援について高校生会が取り組んでいることをまとめ展示し、紹介することができた。

絆コンサート in 大槌への参加

2013 年 3 月 17 日、第 2 回絆コンサート in 大槌が大槌町の城山体育館で開催された。AMDA 高校生会からは有志 6 名がボランティアとして参加し、コンサートの準備運営のほか、コンサートの中で活動報告も行った。参加した 6 名は、いずれも初めての被災地訪問で、被災地の現状を目の当たりにし、肌で感じる機会となり、その後の高校生会の活動に大きく活かされている。

国内の動き

〈公開セミナー〉

岡山県立大学大学院「災害医療援助・持論」公開セミナー 9 月

〈大学講義〉

岡山大学、岡山県立大学大学院、福山平成大学（15 限）、相生市立看護専門学校（24 限）、神戸女子大学等

〈出張講演〉

小・中・高校、教育委員会、企業、官公庁、各種団体からの講演依頼に対応 計 68 件

〈国内連携〉

- ・特定非営利活動法人 BERT（バイカー緊急災害対策チーム、本部：兵庫県神戸市）との協定締結 7 月 27 日
- ・モンゴル赤十字との協力協定を締結 8 月 27 日

〈海外活動地視察教育プログラム〉

- ・おかやま国際塾 インドネシア研修 8 月

〈研修招聘〉

- ・モハマッド・アクバ・アハディ医師（AMDA アフガニスタン支部）8/28～11/27
- ・ネパール看護師 2 名 11/26～12/5

〈海外講師招聘〉

- ・ネパール・トリバン大学医学部付属病院助教授 10 月
小児科医ラミシュワル・ボカレル氏

〈研修受け入れ〉

- ・登喜 望（吉備国際大学法学部）ボランティア活動実習
- ・サルバジッド・チェットリ氏（ブータン王国保健省救命救急士）

〈インターン受入〉

- ・樋口 裕介（岡山大学法学部）
- ・清水 俊助（岡山大学法学部）
- ・ゲン・フーン・チャン・ニエム（ベトナム）（広島国際学院大学）

〈主な主催事業〉

- ・第 5 回市民参加型人道支援外交 AMDA グループ円卓会議および感謝の集い 7 月
- ・AMDA 東日本大震災被災地間サッカー親善プログラム 11 月
- ・復興グルメ F-1 大会
（主催：気仙沼復興商店街 南町紫市場・AMDA）1 月

- ・AMDA 大槌健康サポートセンター 1 周年イベント 1 月
- ・東日本大震災復興支援 第 2 回絆コンサート 3 月

〈主なイベント参加〉

- ・おかやまコープ夏の親子イベント 8 月
- ・笠岡・大空と大地のカーニバル 10 月

- ・チャリティー洋蘭展 1 月
- ・ワンワールドフェスティバル（大阪）2 月
- ・Pray for 東日本がんばろう日本 from bizen チャリティー備前焼販売 3 月

〈AMDA 高校生会〉

- ・大槌高校生会との交流プログラム 7 月
- ・岡山大学医学部学園祭参加 11 月
- ・絆コンサート in 大槌へのボランティア参加・大槌訪問 3 月

AMDA 団体概要

所在地 〒700-0013 岡山県岡山市北区伊福町 3-31-1

設立年月日 1984 年 8 月

国連経済社会理事会「総合協議資格」取得 2006 年

認定 NPO 法人に認証 2013 年 5 月 8 日付

AMDA グループ代表・特定非営利活動法人 AMDA 理事長 菅波 茂

AMDA グループ構成団体

特定非営利活動法人アムダ：AMDA

AMDA インターナショナル（任意団体）

特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構

特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター

アムダ国際福祉事業団

海外活動：

緊急医療支援、復興支援、合同医療ミッション、スポーツ親善交流、ASMP、セミナー開催等

活動国：日本、インド、モンゴル、スリランカ、カンボジア、バングラデシュ、ネパール、インドネシア 他

国内活動：

出張講演、大学講義講師受付、活動報告会・セミナー開催、国内防災訓練対応、高校生会、イベント参加

ボランティア地域組織 3 支部・7 クラブの各地域での活動

AMDA 支部：

兵庫県支部、沖縄支部、神奈川支部、

AMDA クラブ：

大槌、鎌倉、高知、玉野、福山、竹原、夕張
神女（神戸女子大学）

スタッフ：常勤 10 人 非常勤 7 人 嘱託 1 人

会員数：1,254 人

以上 2013 年 7 月 1 日現在

平成 24 年度 活動計算書

平成 24 年 4 月 1 日から 平成 25 年 3 月 31 日まで

貸借対照表

平成 25 年 3 月 31 日現在

科目	金額 (単位:円)	
I 経常収益		
1. 受取会費 会費収入	10,976,485	10,976,485
2. 受取寄附金 寄附金収入	108,195,925	108,195,925
3. 受取助成金等 受取民間助成金	5,061,100	5,061,100
4. 事業収益 事業収入	915,281	915,281
5. その他収益 受取利息 雑収益	58,546 285,719	344,265
経常収益計		125,493,056
II 経常費用		
1. 事業費		
(1) 人件費		
給料手当	25,161,857	
法定福利費	3,650,974	
福利厚生費	38,419	
臨時雇用賃金	561,035	
派遣費	8,831,198	
人件費計		38,243,483
(2) その他経費		
会議費	638,810	
渉外費	416,166	
旅費交通費	21,469,819	
通信運搬費	3,491,154	
医薬消耗品費	1,302,515	
事務消耗品費	2,213,680	
修繕費	6,678	
印刷製本費	429,229	
燃料費	510,235	
光熱水料費	665,349	
賃借料	3,165,794	
保険料	502,576	
租税公課	93,900	
負担金支出	89,520	
委託費	7,017,500	
奨学金	18,180,000	
義捐金	1,269,910	
栄養給食費	1,436,225	
災害救済費	2,327,970	
研修費	145,675	
車両維持費	365,304	
広告宣伝費	86,183	
新聞図書費	18,531	
支払手数料	401,749	
活動器材費	2,300,863	
農業関連経費	264,096	
減価償却費	382,050	
雑費	1,737,382	
その他経費計		70,928,863
事業費計		109,172,346
2. 管理費		
(1) 人件費		
給料手当	5,616,600	
法定福利費	814,966	
福利厚生費	155,231	
人件費計		6,586,797
(2) その他経費		
会議費	194,124	
渉外費	46,105	
旅費交通費	112,496	
通信運搬費	2,367,336	
医薬消耗品費	1,673,046	
事務消耗品費	1,420,065	
修繕費	120,998	
印刷製本費	1,311,771	
燃料費	15,652	
光熱水料費	291,465	
賃借料	3,001,793	
保険料	106,880	
諸謝金	5,000	
租税公課	159,208	
負担金支出	409,830	
委託費	960,750	
支払手数料	820,018	
減価償却費	460,891	
雑費	4,964,760	
その他経費計		18,442,188
管理費計		25,028,985
経常費用計		134,201,331
当期経常増減額		△ 8,708,275
III 経常外収益		
1. 為替差益	5,431,986	
経常外収益計		5,431,986
IV 経常外費用		
為替差損	440,177	
経常外費用計		440,177
税引前当期正味財産増減額		△ 3,716,466
法人税、住民税及び事業税		0
当期正味財産増減額		△ 3,716,466
前期繰越正味財産額		444,860,801
次期繰越正味財産額		441,144,335

※ 今年度はその他の事業を実施していません。

上記決算報告書は、平成 25 年 6 月 15 日に監事の監査を受け承認されたものです。

科目	金額 (単位:円)	
I 資産の部		
1. 流動資産		
現金預金	251,586,558	
貯蔵品	2,676,391	
その他の流動資産	933,297	
流動資産合計		255,196,246
2. 固定資産		
(1) 有形固定資産		
建物	5,971,662	
建物附属設備	719,250	
什器備品	3,885,558	
減価償却累計額	△ 2,238,462	
有形固定資産計		8,338,008
(2) 無形固定資産		
ソフトウェア	240,975	
無形固定資産計		240,975
(3) 投資その他の資産		
敷金	118,000	
プロジェクト準備金	35,747,440	
東日本震災特定預金	160,949,900	
東日本奨学特定預金	16,605,874	
投資その他の資産計		213,421,214
固定資産合計		222,000,197
資産合計		477,196,443
II 負債の部		
1. 流動負債		
未払金	5,546,220	
預り金	505,888	
短期借入金	30,000,000	
流動負債合計		36,052,108
2. 固定負債		
固定負債合計		0
負債合計		36,052,108
III 正味財産の部		
1. 指定正味財産		
前期繰越正味財産	220,389,754	
当期正味財産増減額	△ 35,958,486	
指定正味財産合計		184,431,268
2. 一般正味財産		
前期繰越正味財産	224,471,047	
当期正味財産増減額	32,242,020	
一般正味財産合計		256,713,067
正味財産合計		441,144,335
負債及び正味財産合計		477,196,443

平成 24 年度 財産目録

平成 25 年 3 月 31 日現在

科目	金額 (単位:円)	
I 資産の部		
1. 流動資産		
現金預金		
現金	1,880,284	
普通預金	201,161,769	
外貨現金	38,544,505	
定期預金	10,000,000	
立替金	1,790	
前渡金	125,000	
仮払金	806,507	
貯蔵品	2,676,391	
流動資産合計		255,196,246
2. 固定資産		
(1) 有形固定資産		
建物	5,971,662	
建物附属設備	719,250	
什器備品	3,885,558	
減価償却累計額	△ 2,238,462	
有形固定資産計		8,338,008
(2) 無形固定資産		
ソフトウェア	240,975	
無形固定資産計		240,975
(3) 投資その他の資産		
敷金	118,000	
プロジェクト準備金	35,747,440	
東日本震災特定預金	160,949,900	
東日本奨学金特定預金	16,605,874	
投資その他の資産計		213,421,214
固定資産合計		222,000,197
資産合計		477,196,443
II 負債の部		
1. 流動負債		
未払金	5,546,220	
預り金	505,888	
短期借入金	30,000,000	
流動負債合計		36,052,108
2. 固定負債		
固定負債合計		0
負債合計		36,052,108
III 正味財産の部		
1. 指定正味財産		
前期繰越正味財産	220,389,754	
当期正味財産増減額	△ 35,958,486	
指定正味財産計		184,431,268
2. 一般正味財産		
前期繰越正味財産	224,471,047	
当期正味財産増減額	32,242,020	
一般正味財産合計		256,713,067
正味財産合計		441,144,335
負債及び正味財産合計		477,196,443

計算書類の注記

1. 重要な会計方針

計算書類の作成は、NPO 法人会計基準（2011 年 11 月 20 日 NPO 法人会計基準協議会）によっています。

(1) 棚卸資産の評価基準及び評価方法

最終仕入原価法による原価法により評価を行っています。

(2) 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産については間接法による定額法により減価償却を行っています。

無形固定資産については直接法による定額法により減価償却を行っています。

(3) 消費税等の会計処理

消費税等の会計処理は、税込方式によっています。

2. 事業別損益の状況

科目	国内事業 (東日本関連を除く)	海外長期事業	東日本救援事業	東日本奨学金事業	緊急支援事業	国際会議事業	医療和平事業	事業部門計	管理部門	合計
I 経常収益										
1. 受取会費	0	0	0	0	0	0	0	0	10,976,485	10,976,485
2. 受取寄附金	49,680	4,954,920	23,641,017	3,501,798	5,514,302	0	1,277,863	38,939,580	69,256,345	108,195,925
3. 受取助成金等	331,100	0	1,100,000	0	380,000	3,250,000	0	5,061,100	0	5,061,100
4. 事業収益	60,450	206,363	74,996	0	573,472	0	0	915,281	0	915,281
5. その他収益	0	0	0	0	0	0	0	0	344,265	344,265
経常収益計	441,230	5,161,283	24,816,013	3,501,798	6,467,774	3,250,000	1,277,863	44,915,961	80,577,095	125,493,056
II 経常費用										
(1) 人件費	5,740,264	44,391	18,704,592	0	13,605,691	0	148,545	38,243,483	6,586,797	44,830,280
(2) その他経費	4,306,286	7,580,962	27,319,877	18,251,828	9,149,729	1,156,550	3,163,631	70,928,863	18,442,188	89,371,051
経常費用計	10,046,550	7,625,353	46,024,469	18,251,828	22,755,420	1,156,550	3,312,176	109,172,346	25,028,985	134,201,331
当期経常増減額	△ 9,605,320	△ 2,464,070	△ 21,208,456	△ 14,750,030	△ 16,287,646	2,093,450	△ 2,034,313	△ 64,256,385	55,548,110	△ 8,708,275

注：管理部門に計上されている受取寄附金は使途が制約されていない寄附金の受け取り額であります。

3. 使途等が制約された寄附金等の内訳

使途等が制約された寄附金等の内訳（正味財産の増減及び残高の状況）は以下の通りです。

(単位：円)

内容	期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高	備考
東日本救援事業	182,158,356	24,816,013	46,024,469	160,949,900	東日本復興支援事業に使用しました。
東日本奨学金事業	31,355,904	3,501,798	18,251,828	16,605,874	東日本で医療従事者を目指す学生の奨学金支援事業に使用しました。
合計	213,514,260	28,317,811	64,276,297	177,555,774	

固定資産償却

(単位：円)

内容	期首残高	当期償却額	償却累計額	期末帳簿価額	備考
東日本救援事業	983,064	110,250	229,686	872,814	工具器具備品有形固定資産
東日本健康サポート事業	6,274,480	271,800	344,982	6,002,680	建物、工具器具備品有形固定資産
合計	7,257,544	382,050	574,668	6,875,494	

4. 固定資産の増減内訳

(単位：円)

科目	期首取得価額	取得	減少	期末取得価額	減価償却累計額	期末帳簿価額
有形固定資産什器備品						
建物	5,971,662	0	0	5,971,662	261,260	5,710,402
工具・器具・備品	3,424,370	461,188	0	3,885,558	1,844,682	2,040,876
建物附属設備	719,250	0	0	719,250	132,520	586,730
無形固定資産	535,500	0	0	535,500	294,525	240,975
投資その他の資産	0	0	0	0	0	0
合計	10,650,782	461,188	0	11,111,970	2,532,987	8,578,983

5. 借入金の増減内訳

(単位：円)

科目	期首残高	当期借入	当期返済	期末残高
役員借入金	0	30,000,000	0	30,000,000
合計	0	30,000,000	0	30,000,000

6. 役員及びその近親者との取引の内容

役員及びその近親者との取引は以下の通りです。

(単位：円)

科目	計算書類に計上された金額	内役員及び近親者との取引
(活動計算書)		
貸借料	3,165,794	3,150,000
活動計算書計	3,165,794	3,150,000
(貸借対照表)		
役員借入金	30,000,000	30,000,000
貸借対照表計	30,000,000	30,000,000

AMDA：認定 特定非営利活動法人アムダ役員

理事長	菅波 茂 医師 AMDA グループ代表・元 (医) アスカ会理事長
理事	菅波 知子 医師 元 (社福) 遊々会理事長・元 (医) アスカ会副理事長
理事	中西 泉 医師 医療法人社団慶泉会町谷原病院 理事長
理事	成澤 貴子 認定 特定非営利活動法人 アムダ 事務局長
理事	難波 妙 認定 特定非営利活動法人 アムダ 国際部 部長
理事	野島 治 倉敷市教育委員会 嘱託啓発指導員・元小学校校長
監事	渡丸 弘之 公認会計士

以上 2013 年 7 月 1 日現在

7. 事業費と管理費の按分方法

各事業の経費及び事業費と管理費に共通する経費のうち、給料手当及び旅費交通費については従事割合に基づき按分しています。



AMDA 東日本大震災復興支援
気仙沼市立津谷中学校で開催したスポーツ親善交流プログラム

平成 25 年度も、東日本大震災復興支援事業として、岩手県上閉伊郡大槌町の AMDA 大槌健康サポートセンター、宮城県南三陸町の志津川病院、宮城県石巻市雄勝地域などを拠点に様々な活動を実施しています。皆さまの温かいお気持ちを被災地に届けます。